

群	G10 - 01
教 セ	平16.220集

相手を大切にできる心情を育てる

道徳指導の工夫

— 体験活動を生かした話し合いを通して自分の考えを深める —

特別研修員 宮一 敦志（高崎市立南小学校）

《研究の概要》

本研究は、道徳の時間と体験活動を関連させることを通して、相手を大切にできる心情を育てる道徳指導の工夫について研究したものである。まず、友達から見た自分のよさを知り自分への見方を広める。次に、総合的な学習の時間における車椅子体験学習で、乗る側と補助する側の立場を実感する。そして、その体験活動を生かして相手を大切にすることについて話し合う。友達との意見交流を通して、自分の考えを深めさせるための実践を行った。

【キーワード：道徳 小学校5年 親切 車椅子体験 体験を生かす】

I 主題設定の理由

それぞれに個性が違う個人が、集団生活をする上で、相手と関わることは大切である。そのためには、自分について深く考えたり相手は自分をどう思っているのかを考えたりして、自分をよく知ることである。自分を知ることで目指す自分の姿が分かる。その姿には、他者に対する自分の思いがある。そんな自分が周りから温かく受け入れてもらうことで、多くの人によって支えられていることに気づく。自分の存在が認められたように、相手にも大切な存在として尊重することが大切である。そこに互いに関わることの重要性がある。

かつては、異学年による遊びという体験の場を通して善悪やけじめといったことを上の子から教えられた。決まり事を守ることで遊びが成立することや困っている子に特例を認めるなどの気遣いも身につけた。そこには相手との密接な関わりがあった。しかし、現在では放課後も児童は習い事で忙しく、また安全面でも思いのまま遊ぶことも少なく希薄な友達関係である。

児童は、自分の役割を自覚し協力して一つのことを成し遂げる経験が少ないため、多くの人から支えられていることを実感としてとらえにくい。道徳の時間で「親切」について「なぜ行動に移せないのか。」「はずかしいのか。」の質問に対し、各自の異なる生活経験にたよる他なく、発表者の言葉の奥の「思い」まで感じるができずに実感としての話し合いが深まらない。そのため、よいこととわかっていても照れや他人事のように感じて、日常生活で実践化できていない。

そこで、道徳の時間と総合的な学習の時間における体験活動（車椅子体験）を関連させることを通して、相手を大切にできる心情を育てたい。体験活動を関連させる理由は、体験を行うことで、体験に基づいた親切の意味を実感できるからである。また、共通の体験に基づく実感を伴った話し合いを通して自分の考えが深まる。相手を考えることは、「こうされると相手はうれしいだろうな」という自分の生活経験からくるもので、相手の経験により受け止め方も違いがある。だからこそ話し合いを通して、相手の思いを知り自分の考えとの比較ができる。自分のことを振り返ったり、自分の考えを大切にしながら友達の考えを聞き入れようとしたり、友達の考えは正しいが実際に行動できるか心配で悩んだりして、自分を見つめて相手のことを大切にできる心情を深く考えることができるだろうと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

道徳「相手を大切にすることを育てる」[2-(2)]において、自分のよいところについて友達から聞く活動や、車椅子でのお互いに助け合う活動を基に、共通の体験に基づく実感を持った話し合い活動を通して、相手を大切にすることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 道徳の時間1において、自分のよいところを振り返り、さらに、友達から見た自分のよさを聞くことを通して、自分では気付かない自分を知り、自分への広い見方ができるであろう。
- 2 道徳の時間2において、車椅子の体験活動を基に実感を持った話し合いを通して、相手を大切にすることを育つだろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 相手を大切にすることを育てるについて

相手を大切にすることは、自分の思いを伝えるだけでなく、相手のことを考えて行動すること、時には相手が努力する姿を見守ることも必要である。そのためには、日常生活の中で児童は「こしたら相手はうれしいだろう。」というものを相手との関わりから学ぶことが大切である。相手を他人事ではなく、自分事として気に留めておくことである。こうした経験を積み重ねることで自分の考えの深まりを実感できる。

(2) 車椅子体験活動について

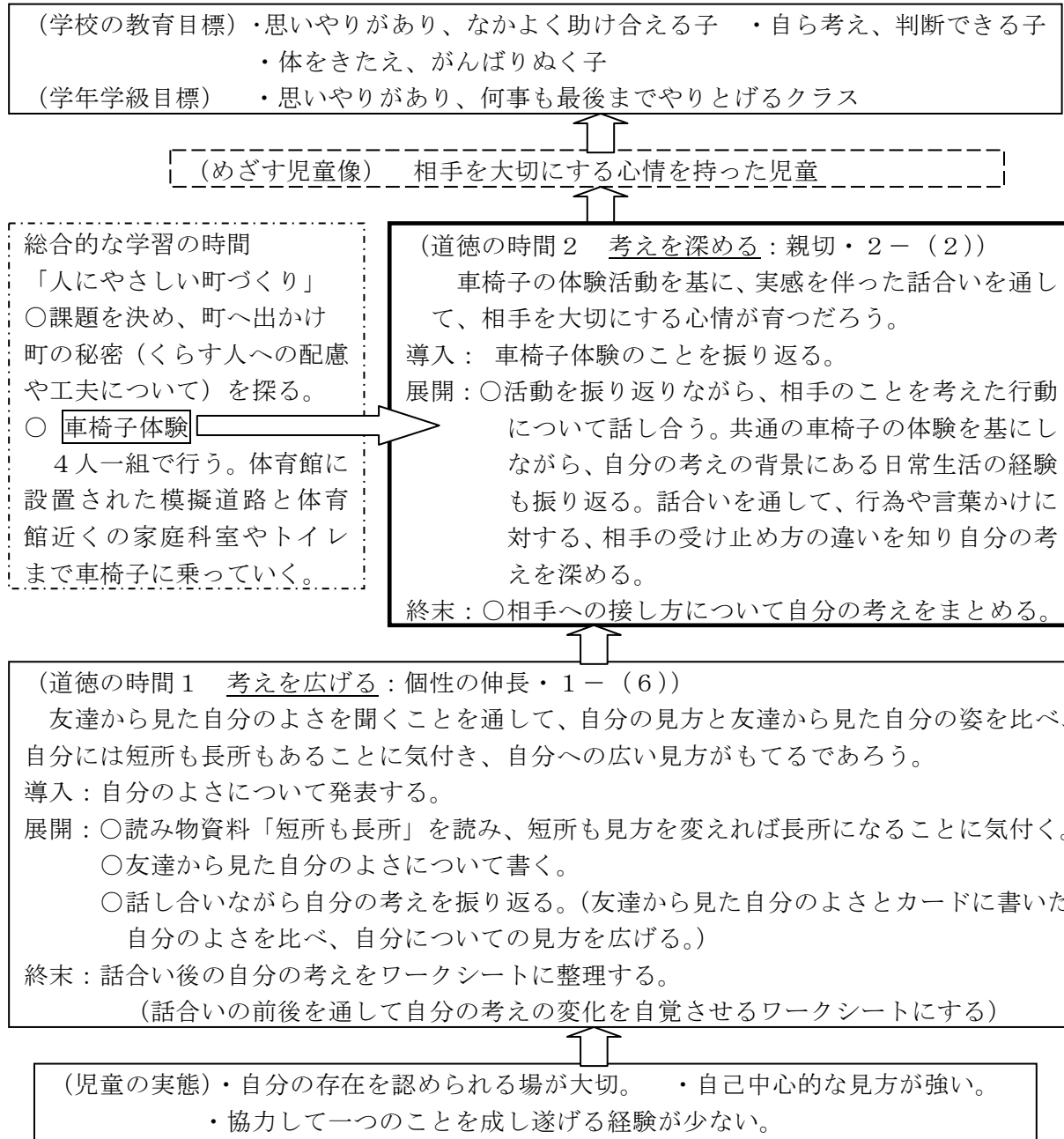
自分の役割を自覚し協力して一つのことを成し遂げる経験が少ないため、多くの人から支えられていることを実感としてとらえにくい。そのために、車椅子体験を行うことで乗る側と補助する側の両方の立場を体験できる。また、自分一人ではできない活動（階段の昇降など）をお互いの協力によって成し遂げる共通の体験ができる。その体験を基に相手のことを考えることで、実感を持った話し合いとなると考える。

(3) 体験を生かした話し合い活動について

自分の気持ちを理解してもらうためには、言葉で相手に伝えることが大切である。話し合い前の準備として、ワークシートに書くことで自分の考えを分かりやすくまとめることができる。発表を通して相手に自分の気持ちを知ってもらえる。また、話を聞くことで、相手の気持ちを知り自分の考えと比べることができる。似ていることに共感したり、違うことで考えを広げたりできる。

道徳の時間1では、友達からの自分に寄せる思いを聞きながら、大切にされ期待されている自分に気付かせたい。車椅子体験後の道徳の時間2では、車椅子体験の写真や児童の感想文を取り上げてその時の気持ちを聞く。体験活動を通して得られた意見のつけたしや違う意見の交換を通して、共感しながら実感を持った話し合いを深めていく。体験から得られた考えと現実の行動を比べる質問を通して、分かっているけど行動できない自分を振り返る。その上で、友達の考えを聞き、かつての自分の苦い経験を振り返り後悔しないために行動しようとする児童、車椅子体験でその大変さを実感したからこそ今度は手伝おうとする児童、こうして児童の考えが深まっていくと考える。

(4) 全体構想図



2 実践の概要及び結果と考察

本学級(小学校5年男子9名、女子19名)の児童は、単学級のため仲間意識が強く、素直で落ち着きがあり進んで発言する。男女ともに仲よく外で元気に遊ぶが、自分の考えをうまく伝えられずに友達に不快な思いをさせてしまうことがある。理想の友達像として、「やさしくしてくれる子、話を聞いてくれる子、頼りになる子」があげられた。自分の思いに率直なあまり、友達の気持ちを考えずに行動する児童もいる。

本研究では、児童の変容を授業中の発言、ワークシートへの記述内容によって検証する。

(1) 友達から見た自分のよさを聞くことを通して自分への広い見方ができたか。

(見通し①)

ア 実践の概要

資料は、友達から見た自分のよいところを書いたカードを見て自分の考えと比べながら自分について深く考える内容〔「短所も長所」個性の伸長・1－(6)〕である。この資料を基に、自分のよいところを振り返る。さらに、相手から見た自分のよさを聞くことを通して、自分では気付かない自分を知り、自分への広い見方ができたか実践を行った。

イ 結果と考察

友達からみた自分のよさをワークシートに書いた。最初は、照れて書くことをためらったり、誰について書こうか迷ったりする児童がいたが、資料を参考にしながら友達との日常生活を思い浮かべ全員が友達のよさをを見つけることができた。また、書くことで自分の考えをまとめることができ、指名されても戸惑わずに発表できた。発表した後に、言われた後の感想を本人に求め、周りの児童にも聞いた。友達の「A男は、笑わせたり、困っているときに声をかけたり友達を大切に人」という意見に、A男は「自分では短所と思っていたことが友達は長所と見てくれて驚いた。」という感想を発表した。でも自分は短所だと思うので相手の意見に納得していなかった。

話し合いを通して、児童は分かりやすく伝えようと考え、聞いていた児童も友達の意見のつけたしや反対意見を述べ活発な交流ができた。話し合いの後、自分の考えをまとめたワークシートの結果が資料1である。『自分ではわからないことを友達から教えられた。』とする児童が21人であった。自分に対するよさについての発表ではなくても、友達の発表を聞きながら、自分では知らないよさや、多面的な見方について自分の中での振り返りができた結果である。

特にA男は「自分とは違う見方をする友達の意見は参考になった。」と記述した。友達のよさの発表や感想を聞きながら、「その考えは自分には当てはまらないが、自分の知らないよさを友達は知っているのだな。そんな話をたくさん聞いて楽しかった。」と、自分とは違う意見を大切にしようとする考えが見られた。

M子は友達のよさを進んで見つけワークシートにたくさん書いた。そのワークシートには「Bさんは、何事にも一生懸命で、頼りになる人」を書いた。話し合いで、Bさんのことを「困っている時は声をかけてくれて何でも素直に話せる人」という意見を聞き、自分の考えをまとめたワークシートには『わたしのBさんへの思いと、友達のBさんへの思いとは違うので人によって見方はいろいろだと感じた。これからはもっとその人の長所をたくさん知ってみたい。』と書いた。自分の考えと比べ、違いを認めたり新たな考えを知ったりすることで自分の考えの広がりを見せた。

話し合いを通して、友達の意見を聞きながら自分の知らないことを教えられたり、それは当てはまらないのではと考えたり、もっとよさを見つけようとしてこれからのことを考えたり、自分についての見方に広がりが見られた。

資料1 友達からみた自分のよさを聞き、自分について考える。

ワークシートの内容	
<ul style="list-style-type: none">・自分について自分で思うことと友達から見た自分がちがうことがわかってよかった。・友達からのいろいろな見方があることを感じた。・自分では分からない自分を友達が教えてくれた。・人には長所もあれば短所もあるのだな。・友達が自分をどう思っているのかよくわかった。・友達から見た自分のことはすこし違っていた。・その人の長所をたくさん知ってみたい。	<ul style="list-style-type: none">・自分では短所だと思っていたことが友達には長所に見えることを感じた。・いろいろと自分を見てくれる友達や親がいることがとてもよい。・自分の短所しか思い浮かばなかった。できたら自分の長所を友達から聞きたい。・自分は次にどうしたらよいかわかった。・やる気が出る。今以上にがんばらないといけないと思う。

(2) 車椅子の体験活動を基に実感を伴った話し合いを通して、相手を大切にすることが育つことができたか。(見通し②)

ア 実践の概要

高校生の主人公が上り坂で車椅子に乗っているおじいさんとの出会いを通して、手助けしようか葛藤する資料である。主人公の気持ちを読み取りながら、相手を大切にすることが育つことについて話し合う。その際、車椅子体験の写真や児童の感想文を取り上げてその時の気持ちを聞く。意見のつけたしや違う意見の交換を通して話し合いを深めていく。話し合いを通して相手を大切にすることが育つか実践したものである。(見通し②)

イ 結果と考察

「坂道を上る車椅子に乗ったおじいさんを助けるか。」という質問で、挙手させたら、助けると考えた児童が18人。助けないという児童はいなかった。わからない児童が9人いた。助けられない児童がいないことと助ける児童が多かったことは、先日の車椅子体験学習の感想にもあるように児童は車椅子で運転することの大変さを実感したためと考える。

話し合いを深めるために「どうして助ける(わからない)のか。」それぞれの理由を聞いた。助ける児童は「車椅子体験をしてその大変さがわかったから。」「自分がおじいさんならば大変だと思うから。」という意見が挙げられた。

わからないという児童は「知らない人なので断られたらどうしよう。」「一人では助けられないと思う。」が挙げられ、行動に移そうか不安で悩んだり、体験活動で実感したことから得られたりした考えが見られた。さらに、体験から得られた考えと現実の行動を比べるために「実際に助けられるのか。」「はずかしくならないか。」を聞いた。「声がかげられない。緊張する。」という反応があった。一つの葛藤場面で考えられる多くの質問に、児童は車椅子体験や日常の経験を基にしながらかつ活発に話し合った。「恥ずかしい時にはどうすればよいか。」の質問に、X子は「人を助けようとするのは恥ずかしいことではない。」と発言し、さらにY子は「お礼を言われるとうれしくなる。」と述べた。「おじいさんだから助けるのか。」「困っているかどうか見た目ではわからない時どうすればいいのか。」の質問に、Z男は「声に出して(相手の気持ちを)聞く。」と答えた。友達の多くのやりとりを聞き、触発されたC男は最後に「自分がされて気持ちよいいことは人にもする。」と発言した。周りでうなずく児童が見られた。

さらに、車椅子体験の児童の感想文を発表させ、「どうして今度は助けたいと思うのか。」と理由を聞くと「自分が体験して大変だったことが分かったので次は手伝う。」と答えた。活発な話し合いを通して、児童は相手を大切にすることは自分がこうするとよいと実感したことをすればよい、他人事と考えず自分事として考える必要があることを感じ取った。

A男は分からないと答えた児童である。理由を聞くと「この前の車椅子体験で階段での車椅子の補助をしたが4人でも大変だった。だからぼくには坂道を押せないと思う。」と答えた。「実際に助けられるか。」の問いにも「声がかげられない。緊張する。」と答え、自分だけではどうすることもできない不安な姿が見られた。車椅子体験の感想でも「(車椅子という)普段では経験できないことができて楽しかった。でも階段で車椅子を持ち上げたり自分でタイヤを回したりしてとてもつかれた。車椅子は大変なので自分の足を大切にしたい。」と書いた。本時では強烈な車椅子体験により実際の場面では自分は手助けの力にならないと考えた。話し合いの後、A男はワークシートに「車椅子体験で一人ではできないことがわかったので助けようとする(自分が)足手まといになると思う。でもできることなら一人でも多くの人を助けたい。」とまとめた。話し合いで多くの友達の考えを聞き自分も発言しながら、助けたいと思う気持ちはありながら体験した車椅子の大変さと思うと行動に移せない本人の迷う気持ちが素直に表されている。

助ける児童の M 子は「走っていて夢中になっても助ける。」と言い切った。車椅子体験の感想では「(車椅子を) 押すのも思うように操作できずに大変だった。補助も思った以上にその大変さがわかったので、今日学んだことを生かして今度は協力し(手伝い)たい。」と書いた。本時のまとめのワークシートにも、「主人公が助けようと思ったのは、おじいさん一人の力では無理だと思ったからだ。前にわたしは助けようか迷っているうちに車椅子の人が坂道を上って行ってしまった。その後『やればよかった』ととても後悔した。(だから) これからはやろうと強く思った。」と書いた。話合いの中で「通り過ぎたときに自分は後悔したくないから助ける。」と発言した X 子の考えを聞き、自分のことを振り返れたのである。そして苦い経験を二度としないように前向きに相手に関わろうとする気持ちがよく表れている。さらに普段の生活にも目を向け、「(ドッジボールを低学年の子とよく遊ぶのは) 相手も一緒に遊べたら喜ぶと思って遊んでいる。(自分が) 低学年の時、5・6年生に遊んでもらったので今わたしたちが見習っているのかなと思いました。」と記述した。教師の「一緒に遊んでいる低学年の子が楽しいと思えば、5・6年生になった時『あの時、高学年の人が遊んでくれて楽しかったから今度はわたしたちと一緒に遊ぼう』と思うだろう。」という話を聞いて普段の生活を振り返りまとめたと考える。

体験活動の写真を見せながら車椅子体験の振り返りでは、児童は共感しながら多くの意見を発表した。その後の話合いでは体験時の感想を交えながら考えたことを発表することで実感を伴った活発な話合いができた。まとめのワークシートを見ると「自分がされていやなことをしない。」「体験から学んだことをこれからの行動に生かす。」「体験し実感することの大切さ。」が書かれていた。話合いを通して、自分のことを振り返った児童、自分の考えを大切にしながら友達の考えを聞き入れようとした児童、友達の考えは正しいのだが実際に行動できるか心配で悩む児童のように、自分を見つめて相手のことを大切にすることを深く考えることができた。

授業翌日の学習活動の班分けでは、以前は孤立する児童が何人かいたが今回は周りの児童が声をかけうまく班を作れた。持久走の練習でも互いに進んで声援を送る姿が見られ実践化が図られた。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- 体験活動を生かした道徳指導の工夫では、車椅子体験によって乗る側、補助する側の両方の立場を体験し、その体験を生かして相手を思うことの大切さを実感できた。さらに、お互いの共通の体験から得た考えを発表し合えたため、相手も発表者の言葉の奥にある「思い」までふれることができ、実感を伴った話合いができた。話合いを通して、自分の体験活動や日常の経験を振り返り、自分の考えを深めることができた。

2 今後の課題

- 実感を伴った話合いを進めるならば、今後も体験活動を取り入れる必要がある。新たに体験活動を取り入れる時間がなければ、道徳の時間と他教科等での体験活動を関連させるために年間指導計画を見直す必要がある。見直すことで「親切」だけでなく他の価値項目での道徳の授業実践が期待できる。

〈参考文献〉

- ・押谷 由夫、長谷 徹 編著『多様な展開で子どもの考えを深める小学校高学年の道徳授業』明治図書(2002)
- ・『道徳授業の新しい展開』小学館(2000)
- ・『道徳教育6月号』明治図書(2004)